

2017年 イグ・ノーベル賞受賞

吉澤和徳 総合博物館資料部研究員・農学研究院准教授



上:トリカヘチャタテの一種 *Neotrogla curvata* の雌ベニス。とげ構造でオスを拘束し、体内深く挿入され精子を受け取る。

下:トリカヘチャタテの一種(未記載種)の交尾状態。メスがオスに馬乗りになり交尾を行う。このペアは洞窟の天井部で交尾していたため、写真は上下逆さまになっている。

CONTENTS

- 01 常設展示室 「鉱物・岩石標本の世界」新設
特別企画 「惑星地球の時空間」実施報告
- 03 イグ・ノーベル賞受賞記
- 06 常設展示〈収蔵標本の世界〉「考古遺物の世界」
- 07 博物館実習
- 12 ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー & コンサート

常設展示室

「鉱物・岩石標本の世界」新設

●2017年8月4日～

特別企画

「惑星地球の時空間」実施報告

●2017年8月4日～ 10月1日



展示室の全景

総合博物館では新たな常設展示室「鉱物・岩石標本の世界」を新設しました。これを記念して特別企画「惑星地球の時空間」を8月4日から10月1日まで開催しました。

当館にはこれまで「アイランドアーク」と名付けられた鉱物や岩石、古生物標本の常設展示室がありました。しかし、2015年4月から本格化した耐震改修工事において、当該展示室を含む3階展示フロアはすべて解体されてしまいました。そして1年4ヶ月間にもおよぶ長い工事休館を経て、3階展示フロアは2016年7月26日に「学術標本の世界」ゾーンとしてリニューアルオープンしました。当初の計画では、鉱物や岩石標本を紹介する展示室も同時にオープンする予定でしたが、標本が持つ学術的背景を存分に紹介するためには資金も時間も不足していることがわかったため、オープンを1年間ずらすことになりました。その1年間に一体何をしていたのか、また、展示室新設にとまなう特別企画の内容について次に紹介します。

展示室のコンセプト設定

鉱物や岩石の展示には宝石や庭石、墓石、火山、鉱山など実に様々な切り口が考えられます。私どもが設定した切り口は「環境」です。「環境」は耳にしない日がないほどありふれた言葉ですが、では「環境とは何でしょうか？」という問いかけに皆さんは答えることができるでしょうか。また、環境の大きさをイメージできる



中川館長とonちゃん(本学特別学生)によるテープカットの様子

人はどのくらいいらっしゃるでしょう。私たちの生活を持続発展可能なものにするための努力が世界中で続けられています、その環境の実体がわからないと何を守ればよいのか判断できません。そこで、「環境のスケールを体感する展示」をコンセプトとして設定しました。

クラウドファンディングへの挑戦

地学は「環境」を扱う分野ですが、～億年前や～万気圧、～千℃といった日常生活とかけ離れた環境を扱うことがあります。そのため、岩石標本などが生まれた環境を理解するためには、地球内部や地球史のスケールを認識するための物差しが必要になります。そこで、地球の半径6400kmを6.4mで表した「地球の大きさ」パネルと地球の歴史46億年を4.6mで表した「地球の時間スケール」パネルの設置を企画しました。しかし、このような巨大なパネルの制作に必要な資金は、当館の体力だけでは賄えないため、クラウドファンディングに挑戦しました。私どもの想いをどのくらいの方が汲み取ってくださるのか大変不安でしたが、開始から1ヶ月で第一目標としていた「地球の大きさ」パネルを作るための資金80万円のサポートをいただき、最終的には第二目標としていた「地球の時間スケール」パネルの制作も可能となる140万円を超えるサポートをいただくことができました。

ボランティアグループの新設

展示室を整備するには当然ながら資金が必要です。クラウドファンディングを通してサポートいただいた資金は大きな活力になりました。しかし、その資金をきちんと活かし、魂のこもった展示室を作り上げるためには、展示コンセプトについて議論を交わし、磨きあげ、そして



ニシジマ・アツシさんのパフォーマンス



展示図録(写真提供:石崎幹男氏)

展示として結実させていくチームの存在が不可欠です。そこでこの展示室を作るためのチームとして新たに「展示改訂(地学)ボランティア」を設け、仲間を募りました。すると、様々なスキルを持った方々が次々と参画してくださり、最終的には10人を越える方々が共闘してくださいました。

展示室の開設

2017年8月4日(金)、ついに展示室を開設できました。オープニングセレモニーは館長による挨拶に始まり、雪田理菜子さん(チェンパロボランティア)が華やかなチェンパロ演奏で花を添えてくださり、テープカットには本学特別学生のonちゃんが参加してくれました。そして、この新しい常設展示室の設置を記念した特別企画「惑星地球の時空間」を10月1日まで開催しました。その期間中に、現代芸術家ニシジマ・アツシさんが時空間をアートで表現するパフォーマンスを2回おこなってください、展示室のガイドツアーや学生らによる展示解説を実施したり、はやぶさ2の最新映像を紹介したり、ミュージアムカフェばらすではコラボ商品として「地層パフェ」を発売して下さったり、大変にぎやかな企画になりました。

さいごに

現在、展示室は「鉱物・岩石標本の世界」として常設展示室に無事仲間入りできました。この展示室を作り上げるため、大変多くの方々にお力添えいただきました。この場をお借りして感謝の気持ちを表します。

山本順司
(研究部准教授/地球科学)

同時開催

吉増剛造「火ノ刺繍
—『石狩シーツ』の先へ」
(札幌国際芸術祭2017) 実施報告

●2017年8月6日～ 10月1日

国際的なアートフェスティバル「札幌国際芸術祭」が今年も開催されました。第1回目となった前回2014年には坂本龍一氏をゲストディレクターに迎え、「都市と自然」をテーマに開催されました。そして今年、大友良英氏をゲストディレクターに迎え、「芸術祭ってなんだ?」をテーマに2回目となる札幌国際芸術祭2017が8月6日から10月1日まで開催されました。世界で活躍する現代アーティストたちが大勢参加し、札幌市内各所で展覧会やパフォーマンスなど、様々なプログラムが展開されました。期間中、北海道大学でも様々なアートイベントが実施され、当館も企画展示室を芸術祭会場の一つとして使っていただきました。

当館の企画展示室で展開されたのは、日本を代表する前衛的な詩人であり、ノーベル文学賞に最も近い日本人として様々なメディアに取り上げられている吉増剛造氏による企画「火ノ刺繍—『石狩シーツ』の先へ」。石狩河口は吉増剛造氏が詩人としての危機を克服し、再生する舞台となった場所。その地から編み出された音声で代表作『石狩シーツ』に結実しました。本展では、吉増剛造氏の詩業を貫くこの『石狩シーツ』のヴィジョンを振り返るととも



吉増剛造氏によるパフォーマンスが行われました

に、その先に待つものへと分け入る新作を発表していただきました。映像、サウンド、写真、銅版、オリジナル原稿など、多様なメディアを用いて吉増剛造氏独特の世界観を表現する展示が展開されました。オープン初日には吉増剛造氏による解説に加え、展示されている絵画作品にインクを播いて完成させるという衝撃的なパフォーマンスも行われ、同時開催となった当館の特別企画「惑星地球の時空間」と合わせて不思議な世界観が来館者を包み込んでいました。

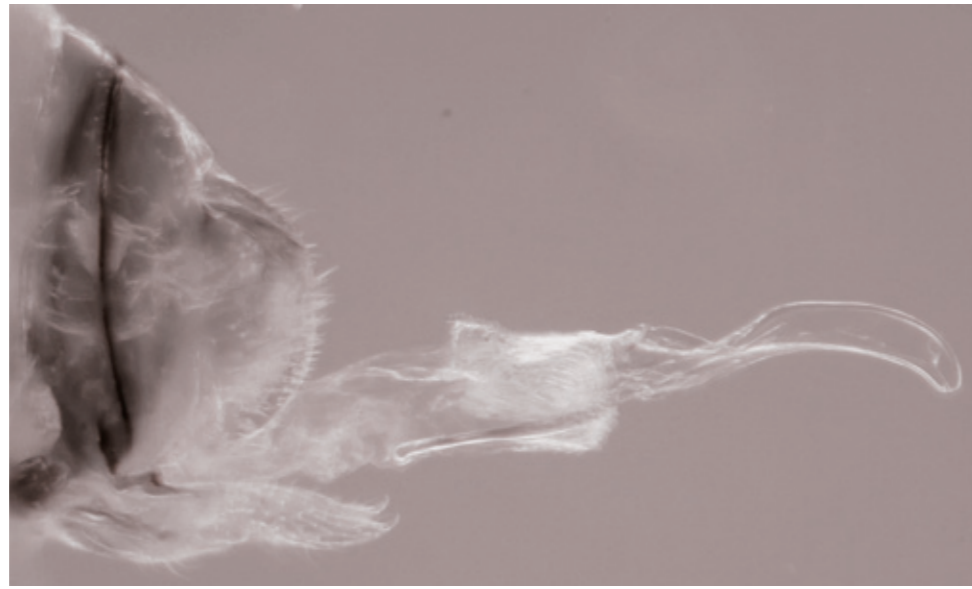
期間中の来室者数は10,234人(本芸術祭の22会場中7番目に多い参加者数)。毎日200人近い方が吉増剛造氏の詩の世界にひたっていらっしゃいました。

山本順司
(研究部准教授/地球科学)



企画「火ノ刺繍-『石狩シーツ』の先へ」 於 当館企画展示室

イグ・ノーベル賞受賞記



トリカヘチャタテの一種
Neotroglia aurora の
雌ベニス

トリカヘチャタテという洞窟棲昆虫から「雌の陰茎と雄の膣」(写真上)を発見したことにより、ブラジル・ラブラス連邦大学の Rodrigo Ferreira 教授、慶應義塾大学の上村佳孝准教授、スイス・ジュネーブ自然史博物館の Charles Lienhard 博士とともに、2017年イグ・ノーベル生物学賞を受賞しました。受賞対象となったのは、2014年に Current Biology 誌で発表した「Female penis, male vagina, and their correlated evolution in a cave insect」という論文です。このタイトルが研究の内容を全て物語っていますし、もう少し突っ込んだ研究内容を書くには紙面が足りませんので(北大プレスリリースなどを参照ください)、ここでは受賞にまつわる裏話などを書きます。

実は結構熱心なイグ・ノーベルウォッチャーで、過去十数年間、受賞内容を楽しみに見てきました。自分も取りたいと思っていましたが、現実になるとは露ほども思わず、受賞を知らせるメールが来た時にはまず詐欺メールを疑いました。メールアドレスを検索して差出人の本人確認をしたり、さらにはメールの経由サーバーまで確認したほどです。どうやら本当

らしいと分かったときには、戸惑いもありましたが、やはりとびきりうれしかったです。授賞式まで厳密な箱口令が敷かれたため、家族以外には秘密で通しました。

ファンとしてはぜひ授賞式に参加して紙飛行機を浴び、スウィーティープーの「もうやめて、つままない!」を生で聞きたかったのですが、授賞式とバッチリ重なる日程で Ferreira と洞窟調査を計画しており、許可申請や飛行機の手配も始めていたため、願いは叶いませんでした。そこで、調査期間中に集まることができた著者3人でビデオを撮ることを決め(写真下・左)、トリカヘチャタテの生息環境である洞窟での受賞スピーチとなりました。撮影を行ったのは9月7日、高知県の四万十川源流にある稲葉洞のほぼ最深部(写真下・右)。授賞式では笑いが取れましたし、ニコニコ動画でも「なんで洞窟 www」と言った反応があり、「笑いをとらねばならぬ」というイグ・ノーベルスピーチの役目は果たせました。

論文が出版された際、その発見の奇抜さから「イグ・ノーベル賞ものだ」と言ってくれる方もいました。しかし「戸惑い」と書いたように、

過去の受賞歴を見てきた一人として、この研究がイグ・ノーベル賞を受賞するとは全く思っていませんでした。なぜなら、他の受賞研究は着想や実験が独創的で、受賞対象はそれを成し遂げた個性的でクレイジーな(褒め言葉)研究者、というイメージでしたが、ぼくらの研究はごく普通の分類学や比較形態学の延長に他ならず、研究者の個性は強くは出てません。今回の受賞にあたってわずかながらの自負があるとすれば、論文のタイトルの出だしに「雌の陰茎、雄の膣」とダイレクトに書いたことです。これでこの論文が、イグ・ノーベルの選考基準である first (タイトルで) make people laugh, and then (本文中) make them think に合致するものになったのでしょう。

ぼくが研究を始めた当時、日本でチャタテムシの分類は20年以上行われておらず、現在でも世界で5人程度しか専門の研究者がいません。このような虫から今回の発見があったことは象徴的だと思います。チャタテムシの分類を研究テーマにできたのは、当時甲虫やハチなどメジャーな分類群をやる学生が充実しており、需要のあまりない分類群をやるゆとりがあったからです。本当に重要な科学的発見というのは、予想もしなかったところから生まれてくるもので、そのためにはゆとりを持った十分に広い裾野が必要です。北大が歴史を誇る博物館を含め、基礎研究のゆとりが無くなって来ていることは本当に心配です。

吉澤和徳
(資料部研究員・農学研究院准教授)



スピーチの様子。左から Ferreira, 吉澤, 上村



スピーチを行った稲葉洞の内部。水の流れる狭い洞内をほぼ腹ばいになりながら進んだ

日本魚類学会 最優秀ポスター発表受賞



桑村哲生日本魚類学会会長から賞状を授与される
木村克也さん

2017年度日本魚類学会年会在9月15日から18日の4日間、北海道大学函館キャンパスにて開催されました。本年度の年会の研究発表において、水産科学院博士後期課程1年で博物館ボランティアの木村克也さんの発表「発表題目: *Hispidoberyx ambagiosus* の形態学的新知見とその系統的示唆、共同発表者: 今村 央教授・水産科学館長、河合俊郎助教」が最優秀ポスター発表賞を受賞しました。授賞式は9月16日にホテル函館ロイヤルで開催された年会懇親会で行われました。*Hispidoberyx ambagiosus* はインド-西太平洋の熱帯に生息する深海性魚類で、世界の研究機関でも15

個体の標本のみが知られる稀種です。その内の6個体は2005年に東部インド洋にて採集された標本で、総合博物館に保管されています。本発表ではそれらの一部の標本を解剖し、本種の内部形態を明らかにした結果を報告しました。今後は本種がどの魚類と近縁であるのかといった系統的な位置を解明するなど、さらなる研究の発展が見込まれます。

河合俊郎
(研究部助教/魚類系統分類学)

第7・8・9回博物館研究会

●2017年7月22日・9月6日・9月27日

博物館研究会を7月22日(第7回)、9月6日(第8回)、9月27日(第9回)に総合博物館1階「知の交差点」で開催しました。

第7回は「人間ゴリラは展示できるか: 生き物と共にあることの探求」をテーマに、大石高典氏(東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター)を講師に迎え、狩猟採集民・農耕民の野生動物観をはじめ、氏の実践されてきた実験的民族誌と博物館の可能性について講演が行われました。他者としての野生動物および行為主体性について、会場との活発なディスカッションが行われました。

第8回は、篠原現氏(国立科学博物館)による「国立科学博物館の展示・学習支援の仕組み〜アマゾンから深海まで〜」の講演が行われ、国立科学博物館の概要紹介、開催中で



第7回博物館研究会
「人間ゴリラは展示できるか: 生き物と共にあることの探求」



第8回博物館研究会
「国立科学博物館の展示・学習支援の仕組み」

あった「深海2017」展実施の経緯、スポンサー等との関係構築をはじめとする展示マネジメント、展示との両輪で進展する研究活動、など幅広く話題が提供されました。

第9回は中野不二男氏(リモート・センシング技術センター/京都大学宇宙総合学研究所)による「可視化と模型-見せる技術・生まれる視界」を開催しました。科学技術の発展における模型の有効性をはじめ、衛星画像を用いて文献上の事象を解明する研究手

法の紹介を通して、可視化によってブレイクスルーが起きることを示されました。当館ミュージアムショップで販売中の「木製衛星模型キット」を制作されている、中野氏が実践されてきた家庭での教育活動にも会場から多くの関心が寄せられました。

山下俊介
(研究部助教/映像資料学)

学術資料の活用を志す人のためのmeeting A*C2017 札幌ラウンド

●2017年4月22日

博物館や美術館、図書館等に収蔵されている学術資料の新しい活用を目指すワークショップ「学術資料の活用を志す人のためのmeeting A*C2017 札幌ラウンド」を総合博物館1階「知の交差点」で4月22日に開催しました。A*C2017のキックオフとなる札幌ラウンドは、学術資料のデジタルアーカイブ化を行う合同会社AMANEが主催し、総合博物館が共催、一般社団法人学術資源リポジトリ協議会および札幌のギャラリー CAI02が後援という体制での実施となりました。ワークショップで

は、堀井 洋氏・上田啓未氏(AMANE)による趣旨説明や活用事例、筆者によるモデルケースとしての台湾歴史博物館での活動事例のほか、美術家の風間天心氏・進藤冬華氏による美術作品と資料活用の取組が幅広く紹介されました。美術家・ギャラリーとのコーディネートと司会は文学研究科の佐々木蓉子さん(芸術学専修・修士1年)が務めました。博物館、美術館等の関係者が出席して学術資料活用のための枠組みについて活発な議論が行われました。



進藤冬華氏による制作活動の紹介

山下俊介
(研究部助教/映像資料学)

企画展示

「ランの王国」～函館キャンパス編～

●2017年5月15日～7月14日

2017年5月15日から7月14日にかけて、函館キャンパスにある総合博物館分館の水産科学館にて企画展示「ランの王国」が開催されました。「ランの王国」展は、2016年7月26日にリニューアルオープンした総合博物館の記念企画展として開催されました。函館キャンパス編ではそのエッセンスが紹介され、ランの標本やランがデザインされた切手や紙幣などが展示されました。また、クマガイソウ、サイハイラン、コケイランなどの北海道に自生する本物のランも展示され、開催期間中に花を咲かせていました。ラン科は陸上植物の中でも多様性が非常に高く、園芸植物としても人気があるため、私たちにとって身近な植物です。本企画展

示の開催期間中には295名の方々が来場され、来場者の中には花が咲くのを見守るリピーターもいらっしゃいました。

水産科学館での企画展示は2014年に開催された「学船 洋上のキャンパスおしよる丸」展に続いて、本企画展示が2度目となります。今後も企画展示を開催していく予定ですので、お楽しみにお待ちしております。

高橋英樹
(研究部特任教授/植物体系学)

河合俊郎
(研究部助教/魚類系統分類学)



「ランの王国」の展示



花を咲かせるラン

第10回「地質の日」記念企画展示

「北海道のジオサイトに見る化石」

●2017年4月28日～6月18日



故郷のジオサイトを発見する来館者

今年で10回目となる5月10日の「地質の日」を記念する企画展示が、4月28日(金)～6月18日(日)に当館1階展示室で開催され、多くの来場者を楽しんでいただきました。主催は地質の日実行委員会・北海道大学総合博物館、共催は日本地質学会北海道支部・産総研地質調査総合センター・道総研地質研究所・北海道博物館・札幌市博物館活動センター・北海道地質調査業協会でした。沼田町化石館からも協力をいただきました。

「ジオサイト geosite」とは、geo(地球・大地) + site(場所)、つまり、地球の永年の営みや活動の証が地表に現れているところで、地球科学的に特に貴重な事物(地形・地質・岩石・鉱物・化石など)や現象(断層・褶曲・堆積構造

など)が観察できる特徴的な場所(自然遺産)のことです。

北海道には、そのダイナミックな地質学的形成史を反映して、たくさんの地球科学的に貴重なジオサイトがあります。今回の展示では、昨年刊行された『北海道自然探検 ジオサイト107の旅』(日本地質学会北海道支部監修)に紹介されたジオサイトの中から化石に関わるジオサイトの見どころをパネルで紹介するとともに、札幌市のサッポロカイギュウや沼田町のヌマタネズミルカの実物大模型や道内のアンモナイト標本を展示し、皆さんを北海道の自然の生い立ちを楽しく学ぶことのできるフィールドへお誘いしました。

体長7mを超える世界最古のサッポロカイギュウの迫力やきれいにクリーニングされた学

生地学愛好クラブ「シュマの会」提供の多数のアンモナイト化石は好評でした。故郷のジオサイトを発見した市民もいらしたようです。

関連イベントとして、古沢 仁氏(札幌市博物館活動センター)による「ジオサイトとしての札幌の魅力」および川村信人氏(北大理学研究院自然史科学専攻)による「北海道ジオサイト107への旅に出て」の2件の市民セミナーが当館「知の交流」ホールで開催されました。市民地質巡検(ジオサイト「藻岩山」を歩く)には定員を超える応募がありましたが、残念ながら雨天中止となりました。

在田一則
(ボランティア)



会場を圧したサッポロカイギュウ

常設展示
収蔵標本の世界

3階常設展示「収蔵標本の世界」では、総合博物館が所蔵する300万点を超える標本の一部を展示しています。前号に引き続き、展示室毎に取り上げて紹介します。

常設展示

「考古遺物の世界」

考古学は遺跡から出土した「遺物」と、その土に残された痕跡である「遺構」から人類の過去を復元する学問です。遺跡にその遺物や遺構が残された背景には、何らかの理由があるはずで、考古学者の仕事は断片的な証拠をつなぎ合わせてその謎を解き明かすことです。当館の「考古遺物の世界」では、「謎の海洋狩猟漁労民」とも呼ばれるオホーツク人の残した遺物を展示しています。これらの遺物は、オホーツク人の謎の解明に大きく貢献した礼文島の香深井1遺跡から出土したものです。

オホーツク文化は、本州における古墳時代の半ばから鎌倉時代(4～13世紀)にかけて、オホーツク海の南半沿岸一帯に展開した文化です。オホーツク文化の遺跡は砂丘や海岸段丘上に位置し、オホーツク人が海と強く結びついた生活を送っていたことがよくわかります。オホーツク人の由来は諸説ありますが、人類学的分析からは現代のアムール河下流域に住むウリチ民族などの人々に近いとされています。

北海道大学では、1966年に開設された「北海道大学文学部附属北方文化研究施設」において、オホーツク文化の本格的な研究がスタートしました。北方文化研究施設が1969年から1972年に調査した遺跡が礼文島の香深井1遺跡です。礼文島は北海道の北端・稚内の60kmほど西にある島です。レプンアツモリソウなどの高山植物が平地でもみられることで



オホーツク文化の土器と香深井村のジオラマ

有名です。香深井1遺跡の調査では、オホーツク文化の前期から後期までの数百年にわたる厚い文化層の重なりが発見されました。土器や石器、骨角器、貝や動物骨などたくさんの遺物とともに、オホーツク文化の竪穴住居址6軒と墓3基などがみつけられました。

これらの遺物や遺構の詳細な分析から、世帯あたりの占有面積や集落全体の世帯数・人口、漁労を中心とした生業の季節的なサイクル、ヒグマやクジラを対象とした祭祀、石器や鉄器の素材あるいはヒグマやシカなどの動物の交易など、香深井1遺跡にあったオホーツク文化の人々の生活や社会の具体的な様子、そしてそれらの時間的な変化が明らかになりました。これらの知見は、発掘から50年以上が経過した現在でもオホーツク文化を語るうえで欠かせないものとなっています。

香深井1遺跡から出土した遺物は、総合博物館の設立とともに当館に移管されました。その後、当館の展示資料として活用される一方、学内外の研究者によって最新の研究手法を

用いて調査・研究されてきました。たとえば、展示でも紹介している住居内の骨塚(≒祭壇)からみつかったヒグマの頭骨からDNAを抽出し、現在のヒグマと比較した研究があります。その結果、成獣が道北地方に由来するのに対して、幼獣には道南地方から持ちこまれた個体も含まれることがわかりました。当時、道南地方には続縄文文化と呼ばれる別の文化圏の人々が暮らしていたことから、ヒグマに対する畏敬の念や価値観を異文化の間で共有していた可能性が考えられています。

香深井1遺跡から出土した遺物は、今後も最新の手法を用いて研究されることで、オホーツク文化に関する新たな知見を提供し続けると考えられます。資料の破損とその分析から得られる知見、教育・研究への活用と後世への引継ぎを天秤にかけながら、適切に管理していきたいと考えています。

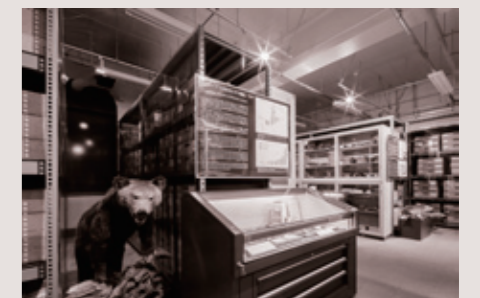
江田真毅
(研究部講師/動物考古学)



ジオラマで再現された香深井村の住居の内部構造



アホウドリ科の骨で作られた針入れ



オホーツク文化のヒグマの儀礼に関する展示

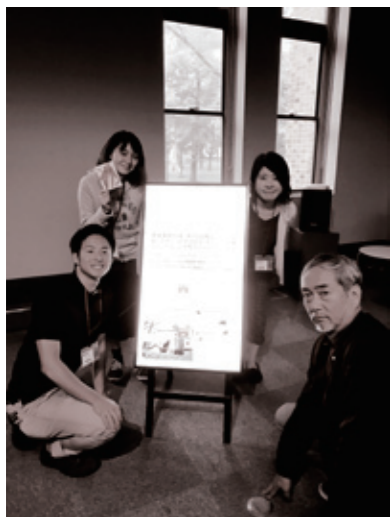
博物館実習

●2017年9月5日～9月8日、9月11日～14日

総合博物館では、北海道大学学生を対象にした学芸員実習を実施しています。実習は、学芸員養成課程のさまざまな科目を受講した後、博物館の現場で実務を学ぶ科目として位置づけられています。

今年度は9月上旬の8日間、午前中の演習と、午後は第2農場・地学・古生物・動物・映像という4班に分かれての実習というスタイルで行いました。実習生は、学部4年生から博士後期課程3年生までの専門分野も異なる13名でした。8日間では博物館活動の全てを習得するには限界があること、班メンバーの専門レベルに偏りがなく、所属する研究室では体験できない実習に取り組んでほしいことから、各自の専門分野以外の班での実習に臨みました。

午前中の演習では、当館の教員全員がそれぞれの研究と教育、博物館活動について紹介し、展示室やバックヤードを見学したり、標本資料に触れる時間を設けました。また、理学・生命科学事務部博物館担当の谷地中大介係長による博物館運営や事務スタッフの業務についての説明、研究支援推進員の西本結美さんと高橋一葉さんによる館内サインのパネル製作の実習も行われました。



デジタル・サイネージのコンテンツを制作した第2農場班

第2農場班では、札幌農学校第2農場の模範家畜房・穀物庫・牧牛舎に設置するデジタル・サイネージのコンテンツを制作しました。

近藤誠司資料部研究員の指導のもと、文献調査や北方生物圏フィールド科学センター酪農生産研究施設の見学を通して各施設への理解を深め、修学旅行で訪れることも多い高校生を対象に分かりやすく興味をひく説明文をまとめ、英訳を付し、画面デザインを工夫しました。



白亜紀の展示をブラッシュアップした古生物班

地学・古生物班の鉱物・岩石分野では、山本順司准教授からユニバーサル・デザインや展示制作の実際について学んだ他、標本整理や、身近な題材で本物にこだわり安全で安価な教材を開発する取り組みの一部を体験しました。古生物分野では、越前谷宏紀資料部研究員から当該分野の研究・展示制作について学び、来館者の視点をより意識して3階展示室「古生物標本の世界」の白亜紀関連の既存の展示をブラッシュアップさせました。



鳥標本を製作する動物班

動物班では、江田真毅講師から、鳥類の解剖と骨標本の作製について学び、解剖を行った他、イヌ科の標本の頭骨と下顎骨を整理し

てデータベースを作成しました。大原昌宏教授からは、鱗翅目と甲虫目の寄贈コレクションについて、ラベリング・写真撮影・データベース作成の一連の作業について学び、ホームページでデータベースの公開を行いました。



ビネガーシンドロームのテストを行う映像班

映像班では、山下俊介助教と杉山滋郎資料部研究員から、映像フィルムや写真資料の目録作成・保管方法について学びました。昆虫の研究者から寄贈された大量の写真やフィルムが収められていた箱を開け、調査・整理して目録を作成し、情報を特定していく姿勢やデータベースに付与すべき内容について考察を深めました。他にも水産学部の教育で使用されていた掛図の目録を作成する際には、写真撮影方法の検討も重要な課題でした。また、映像のショットリストの作成やフィルムの劣化診断も行いました。

最終日には、各班が取り組んだ内容と考察を発表する報告会を開催しました。実習生から他の班の取り組みについて多くの質問が寄せられたり、教職員からも様々な意見やアドバイスが述べられました。発表会での意見交換や事後レポートからは、実習生達が、標本資料を未来に残していく意義、調査・保存に取り組む姿勢、展示制作における留意事項について理解を深め、さらに来館者を意識した諸活動にこめた博物館の思いを深く認識したことがうかがえます。

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)

座談会

「写真で楽しみかたり」

●2017年5月21日

ミニ展示

北海道大学総合博物館
「みんなの楽しみ方」

●2017年7月25日～8月27日

昨年度より、理学院博物館教育・映像学研究室に所属する私の修士研究の一環として、北大総合博物館の「楽しみ方」調査を行っています。研究の目的は二つあります。一つ目は、利用者の視点を通して博物館の価値を考えることで、博物館が潜在的に持つ機能や資源を明らかにすることです。二つ目は、「楽しみ方」を人々と共有することで、他の利用者や博物館運営に関わる人々に、「博物館」や「利用者」への見方を広げていただくことです。これまでに、アンケート等による利用者の「楽しみ方」調査を行い、その「楽しみ方」を共有するための2回の座談会とミニ展示を開催しました。調査では、人それぞれに異なる利用方法があり、博物



和やかな雰囲気で行った座談会

博物館における北海道大学 初任事務職員実地研修

●2017年8月22日～9月1日

本学の2017年度初任事務職員49名の人材育成の一環として、総合博物館での実地研修が実施されました。本研修は本学の徳久治彦理事・事務局長のご発案により実現したもので、来館者への本学の歴史と現在についての説明や展示室での案内といった実務体験を通じて、本学への理解と知識をより深め、職員としての意識を高めるとともにコミュニケーション能力の養成を目指しました。

古い黒板を活用した
ミニ展示



館は人々に多様な経験を提供できる場であることがわかりました。

2017年5月21日に開催した座談会「写真で楽しみかたり」には、4名のボランティアが参加し、持ち寄った写真を見ながら博物館の楽しみ方について2時間語り合いました。他の人の楽しみ方に対して、共感したり、違う視点を提供したりと、盛んな議論が行われました。最後には一人一人の博物館に対する思いを聞くことができ、楽しみ方を共有する有意義な時間となりました。

そして、ボランティアだけでなく、より多くの来館者と楽しみ方を共有することを目指して、2017年7月25日より約1ヶ月間、博物館1階のラウンジで、ミニ展示「北海道大学総合博物館「みんなの楽しみ方」」を開催しました。調査で得た楽しみ方に関するテキストに私自身が描いたイラストを添えて紹介し、さらに、見学者自身の楽しみ方をカードに書いていただくコーナーを設けました。ここには、幅広い年代や国

籍の方々にご協力いただき、計88件の楽しみ方が寄せられました。「展示物のモノマネをしながら見ていく」や「疲れたときのヒーリングスポット」等の個性的な視点の数々は、博物館は開かれた楽しみ場であり、そこでの過ごし方は自由であることを示してくれまます。見学した方々からは、「他の方の視点が知ることができて面白い」、「頭を柔らかくすると博物館の魅力は無量大」等の声が聞かれました。博物館の教員からの意向により、展示の一部は常設展示室に場所を移し展開されています。

今後は、さらに多くの人々と楽しみ方を共有するため、一連の研究報告を1冊の冊子にまとめます。こちらもぜひご覧いただき、北大総合博物館の魅力について改めて考える機会としていただければ幸いです。

増田彩乃

(理学院修士2年)



七国立大学の事務担当理事に解説する初任職員

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)

「惑星地球の時空間」 展示解説を担当して

●2017年8月4日～10月1日

ミュージアムマイスターコースの一環として、理学部3年の守屋友一朗さんと共に特別企画「惑星地球の時空間」の展示解説に8回取り組みました。事前に、企画展担当教員の山本順司先生から展示の概要を、展示解説担当教員の湯浅万紀子先生から解説時の振る舞いなどについて指導を受け、解説に臨みました。私は岩石・鉱物についての知識はあまりなかったのですが、準備を重ね、解説を通し、理解を深めていきました。解説時に受けた質問は回答とともに、解説員同士で共有しました。また、解説終了後は毎回、レポートを湯浅先生に送り、アドバイスを受け、次の対応に活かしていきました。



旭川啓明小学校の児童に解説する様子

展示室で解説をすると、来館者の展示への関わり方について自分の目で見る事ができ、人それぞれの関わり方を知ることができました。それと同時に、こちらから話をするだけでなく、来館者からもお話を聞く機会もあり、私も多くのことを学ぶことができました。その中で、北海道各地の地質に関する詳細情報や岩石鉱物にまつわる過去の思い出を聞くことができたことで、来館者が展示物は展示ケースに入っているものであっても身近なものとしてとらえていることがわかり、展示をどのように受けとめているのかを知ることができました。博物館は学ぶ場所であるとともに、モノやヒトとの関わりが多く生まれる場所であることを改めて実感しました。私も、これからも博物館について活動に関わりながら幅広く学んでいきたいです。

徳丸沙耶夏
(理学院修士1年)

学生企画

「学芸員まるごと! 体験ツアー in 北大総合博物館」

●2017年7月16日



構内での植物採集

私たち大学生・大学院生10名は、7月16日(日)に小学生を対象とした「学芸員まるごと! 体験ツアー in 北大総合博物館」を開催しました。このイベントは学生自身でプロジェクトを企画・実施・評価する北海道大学大学院の授業「博物館コミュニケーション特論Ⅰ」の一環として実施しました。私たちは、より博物館のことを知ってもらうことを目的とするとともに、夏休み前に小学生を対象として実施することで夏休みの博物館の利用を促進し、夏休み以降も博物館を訪れてほしいという思いを込めて企画しました。

当日は、事前応募のあった小学生10名と私たち学生が4グループに分かれて行動を共にしました。午前中は、グループごとに館内を見学し、学芸員の仕事の説明をすることで、博物館の活動全体と学芸員という仕事について理解を深めていきました。その後、学生食堂で小学生と私たち学生が昼食を共にすることで交流を深めました。午後は、あいにくの悪天候の中でしたが構内に植物の採集を行い、室内にて植物の同定、標本作製、一日の成果の発表、博物館2階の「感じる展示室」への標本の展示といったプログラムを通して、学芸員の仕事の一連の過程を体感してもらいました。小学生へのアンケート結果や当日の様子から、展示以外の博物館の活動についても理解してもらえたことがわかり、より博物館のことを知ってもらうという第一の目的の達成を確認するとともに、北大生や他校の小学生と交流しながら楽しんで積極的に参加してくれたことで、小学生にとっても特別な1日となったことを実感しま

した。また、当日の発表の場面をご覧になった保護者・来館者の方々から、当日の対応や事前のアレルギー対応などについて高い評価をいただきました。

イベント後も、参加した小学生が再び博物館を訪れ、自身で作製した標本をご家族に嬉しそうに解説し、写真撮影していたといった例が報告され、第2の目的である博物館を再び訪れてもらうことも達成されつつあります。

担当学生: 青木彩峰・神田いずみ(文学研究科)、織田未希・久保孝太・徳丸沙耶夏・朴隼赫・米田しおり(理学院)、東出崇志・福原康平(工学院)、守屋友一朗(理学部)
協力: 高橋英樹・植物ボランティア
指導教員: 湯浅万紀子

守屋友一朗
(理学部3年)



一日の成果の発表

北大エコキャンパス観察会 — サクシュコトニ川沿いの 遺跡・花・虫 —

●2017年6月24日

1972年6月に開催された国連人間環境会議を記念して、日本では6月が環境月間に指定されています。この環境月間の恒例行事として、今年も6月24日(土)に「北大エコキャンパス観察会 —サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫—」を開催しました。

当日はあいにくの空模様にもかかわらず、過去最高となる57名の皆さんにご参加いただきました。高橋英樹特任教授(植物学)、北大農学院博士課程の菊地波輝さん(昆虫学)、そして江田(考古学)の三人がガイドとなり、観察会をおこないました。



クサアリを解説する菊地さん

構内を流れるサクシュコトニ川に沿って散策しながら、草花や昆虫、遺跡の発掘調査跡について解説・観察しました。菊地さんによるクサアリやネクイハムシの解説では、お子さんが前面に乗り出し、食いつくように聞き入っていました。また高橋特任教授の宮部金吾にまつわる話では、熱心にメモや写真を取る方が大勢いらっしゃいました。

足元が悪く、原生林に立ち入ることはできませんでしたが、マガモの親子や草を食べるヒツジのほのぼのとした姿もみることができました。北大キャンパスの自然と歴史の豊かさ、そして広さを体感いただけたものと思います。「北大エコキャンパス観察会」は今後も継続を予定しています。来年の6月、皆さんも足を運ばれてはいかがでしょうか。

江田真毅
(研究部講師/動物考古学)

カルチャーナイト2017 「星空とチェンバロの夕べ」

●2017年7月21日

カルチャーナイトとは、札幌の夏の一夜、公共施設や文化施設、民間施設を夜間開放し、市民の方々に地域の文化を楽しんでいただくイベントで、当館では例年「星空とチェンバロの夕べ」というテーマで参加し、今年もこの日だけの特別プログラムを用意しました。

チェンバロコンサートでは、当館のチェンバロボランティアと北大生によって全7曲演奏され、バロック音楽の心地よい音色を楽しんでいただきました。宇宙の4Dシアターでは「萌えろロケット」と題して、北大で実際にロケットを研究している大学院生の解説や4Dボランティアと学生による手作りペットボトルロケットの発射などを行いました。この日はあいにくの曇り空で、札幌星仲間による夏の星座の観望会では星空を見ることは叶いませんでしたが、珍しい望遠鏡を覗いたり、どのような星が見えるのかなどの説明を受けていただきました。他にも、ハンズオンボランティアが「感じる展示室」で鉱物・岩石のワークショップを行い、熱心な来場者と交流の場を創っていました。

「エルムの杜の宝もの」 道新ぶんぶんクラブとの 共催講座を開催



近藤誠司資料部研究員による札幌農学校第2農場見学会
[写真提供:道新ぶんぶんクラブ]

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、北海道大学の研究を知っていただく機会になっています。2017年度は、4月に市民の方々の関心も高いクラーク博士について植物学の研究者としての側面からの講義、5月に小学生親子を対象



4Dシアターでのペットボトルロケット発射準備



夏の星座の観望会

今年も多くの方にご参加いただき、リニューアルオープン後初のカルチャーナイトを楽しんでいただけたと思います。

西本結美
(研究支援推進員)

にした昆虫学の講義を行いました。6月には札幌農学校第2農場見学会を開催し、少人数に分かれて講師と第2農場ボランティアによる解説ツアーを実施しました。7月には公開直前の常設展示室新設特別企画「惑星地球の時空間」の見学会と館内全体の解説ツアーを行いました。毎回、多くの方が熱心に参加され、展示解説ボランティアの協力により運営されました。

4月22日 クラーク博士と札幌の植物
高橋英樹(植物体系学)

5月27日 小学生親子昆虫教室
大原昌宏(昆虫体系学)

6月24日 札幌農学校第2農場見学会
近藤誠司(家畜生産学)

7月29日 特別企画「惑星地球の時空間」・
常設展示の見学
山本順司(地球科学)・湯浅万紀子(博物館教育学)

湯浅万紀子
(研究部教授/博物館教育学)

北海道大学 ホームカミングデー 2017

●2017年9月30日・10月1日

秋晴れに恵まれた今年のホームカミングデー、総合博物館では2種類のイベントが開催されました。

総合博物館を舞台に活動するミュージアムクラブMouseionは、「文学部らしくない? 文学部の研究」、「ポードーツリズムってなに? ~新しい国境の捉え方~」、「北大昆虫研究の歴史と今」、「電波望遠鏡を用いた宇宙観測」、「時代のタイムカプセル 新聞紙の世界&博物館ボランティア活動の一端紹介」という各自で作成したオリジナルの解説で来館者の方を迎えました。緊張しながらも一生懸命解説する姿に来館者の方から温かい励ましのお言葉をいただいたり、理学部出身の方は、もともと理学部の校舎だった博物館の建物を懐かしみ、当時の思い出や知られざる情報を教えてくださったりと、ホームカミングデーならではの交流もできました。

また、総合博物館では鉱物・岩石標本に関する新たな常設展示室「鉱物・岩石標本の世界」を新設したことを記念した特別企画「惑星地球の時空間」を8月4日から開催しており、その展示解説を総合博物館の山本順司准教授



ミュージアムクラブMouseionによる展示解説

(地球科学)が9月30日(土)、10月1日(日)に1日1回(計2回)実施しました。初回は20名ほどの参加者を迎え、午後1時から30分間程度で解説を終えましたが、その後、参加された方々から大変多くの質問をいただいたため、ほかの来館者を巻き込んで午後3時過ぎまで続くにぎやかなイベントになりました。2回目も20名ほどの参加者を迎え、午後4時から開始しました。初回と同様、大変多くの質問を頂戴し、閉館時間である午後5時を越えても終わらないほどの盛況ぶりでした。

一方、メイン会場で流れるホームカミングデーの映像は、総合博物館の山下俊介助教(映像資料学)が撮影・制作を行いました。映像では、北大の伝統であるフィールドワークとして総合博物館の大原昌宏教授(昆虫体系学)によるカナダでの海浜性昆虫の採集・調査活



「惑星地球の時空間」担当の教員による解説

動を冒頭に取り上げたほか、おしよる丸での海洋実習や中川研究林の冬山造材、弓道部の活動風景、大野池をはじめとするキャンパスの様子など、北海道大学の活動を紹介しました。

(事務室)



メイン会場で上映された映像

北大生による展示解説 in 北大祭、オープンキャンパス

●6月3日・4日、8月6日・7日



北大の昆虫学研究についての展示解説

北大ミュージアムクラブMouseionでは、北大生が総合博物館を中心に活動を行っています。

6月3日・4日の週末には、北大祭に合わせて展示解説を開催しました。博物館が耐震改修工事・リニューアル準備のために休館していた間は北大祭での実施はなく、今年は実に3年



持ち歩いた案内板

ぶりの開催でした。現メンバーにとって初めてのことであり、あまりの来館者の多さに圧倒され緊張しました。しかし、多くの方々に解説を聞いていただけたことで、今後の活動の糧となる有意義な時間が過ごせたと感じています。

8月6日・7日の週末には、オープンキャンパスでの展示解説を行いました。担当の展示を解

説するだけでなく、北大生であるメンバーが館内を巡回して来館者と気軽に話すという新たな企画を実施しました。高校生やその保護者の方が多く訪れていた印象がありました。巡回しつつ話しかけると、展示についてだけでなく学生生活などについて様々な質問が寄せられました。その質問にお答えしたり、こちらから来館者に質問をしてみたりと、博物館という場所を通して活発に対話することができ、達成感がありました。新企画であったため、最初は「北大生と来館者の対話」が想像通りに成立するのか不安でした。しかし実際に行くと、興味をもって話しかけていただいたり、想像以上に話が盛り上がる場面がありました。

今後も新たな企画を行いながら、博物館での活動に取り組んでいきたいと思えます。

伊藤優衣
(文学部3年)

ミュージアム・カフェ

金曜ナイトセミナー＆コンサート

総合博物館では、6月～10月の金曜夜は午後9時まで開館時間を延長し、「ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー＆コンサート」を「知の交差点」を中心に開催しました。夜の6時半から8時まで、隣にあるミュージアムカフェ「ぼらす」で購入できる飲み物を片手に、夏と秋の夜長を勉強や音楽に親しもうという企画です。セミナーは、6月16日に第1回目が催され、以下第5回まで開催しました。

第1回 6月16日 湯浅万紀子(博物館教育学)
「夜の博物館から時間旅行」

第2回 7月28日 山下俊介(映像資料学)
「博物学会の夜明け:明治期博物学会の比較から」

第3回 9月8日 江田真毅(動物考古学)
「ナスカの地上絵に描かれた鳥は何か? 一鳥類形態学からの検討」

第4回 9月29日 中川光弘(火山学)
「火山としての支笏洞爺国立公園を評価する: 国内最大級の火山活動場の誕生と変遷」

第5回 10月20日 吉澤和徳(昆虫学)
(イグ・ノーベル賞受賞記念講演)
「性器の逆転した昆虫、トリカヘチャタテ」(R-12)

学生やチェンバロ・ボランティアによるコンサートは全部で4回開催し、異なるジャンルの音楽を楽しむことができました。

第1回 6月9日
テレマン ヴィオラ協奏曲 他(北海道大学交響楽団)

第2回 7月7日
BLUEGRASS! (北海道大学ブルーグラス研究同好会)

第3回 8月11日
邦楽の夕べ(北海道大学邦楽研究会)

第4回 10月27日
室内楽の世界(北海道大学交響楽団)

こうした取り組みは、博物館が展示物を見るだけの場ではなく、人と人の交流の場、大学内の学際的な交流と公開の場であろうとするミッションの発露です。今後も様々なアクティビティ公開の場として、学内外の多様な方々の利用をお願いいたします。



イグ・ノーベル賞を受賞した吉澤准教授による第5回セミナー



ミュージアム・カフェ・ナイトコンサート 室内楽の世界

大原昌宏
(研究部教授/昆虫体系学)

国際化推進イベント

Sci-Tech Talk in English

左/NASAのSteve Vance博士
による第13回Sci-Tech Talk
右/国際連携機構のAlex Pettitt
博士による第15回Sci-Tech Talk



理学研究院国際化支援室(OIAS@SCI)では2013年より英語による非専門家向けの科学トークイベント“Sci-Tech Talk in English”を開催しています。

本イベントは主に本学の留学生、外国籍教職員、英語上達を目指している日本人学生そして札幌在住外国籍住人を対象としており、日常日本語のバリアによって気軽に科学に触れ合える機会が少ない外国籍大学関係者および地域住民に科学リテラシーを身につける機会を提供しています。また本イベントを通じ本学の基本理念である「国際性の涵養」「全人教育」の一環として本学および札幌の国際化推進への貢献を目的としています。

本イベントの講師は本学教員または他務所で本学を訪問している著名な外国人研究者が行っています。取り扱うテーマは宇宙探査、古生物学、海洋酸性化、考古学、地震、創薬、生物多様性などの身近なテーマを多岐に渡って扱っており幅の広い科学教養を身につけることが可能です。

本イベントは昨年まで理学部内や本学附属図書館で開催してきましたが2017年1月の第13回Sci-Tech Talkより総合博物館の協力を受け、より公共性が高い総合博物館1階の「知の交差点」にて開催しています。総合博物館が開催している「ミュージアム・カフェ金曜ナイトセミナー」と同様にビールやコーヒーを飲みお菓

子を食べながら参加できるカジュアルなイベントです。

“Sci-Tech Talk in English”の詳細については下記のウェブサイトおよびフェイスブックページをご覧ください。

HP: <http://www.sci.hokudai.ac.jp/international/project/sci-tech-talk/>
Facebook: <https://www.facebook.com/OIAS.Sci/>

河村 裕
(理学研究院国際化支援室長・教授)



「タイガからのメッセージ」上映会 & 座談会 ビキンの人と自然

●2017年9月2日



座談会の様子(左から野口さん、高橋さん、田邊さん)

総合博物館内の文学部展示スペースでダイジェスト版を常時流している標記ドキュメンタリー映画のフルバージョン上映会を開催しました。日本海を隔てた対岸のロシア沿海地方、北海道の北端よりやや高緯度のあたりを西へ横切って流れるビキン川の流域には今も手つかずの森が広がっています。現地でタイガと呼ばれるこの森は、針葉樹だけでなく広葉樹も混じる豊かな植生で知られ、多くの動物ばかりでなく、先住民ウデへの人々の暮らしをも育んできました。しかしながら、近年のグローバル化の波はこの地にもおよび、外国資本を含む大規模な森林伐採による環境破壊や、急速な近代化にともなう伝統文化の喪失が現実の問題となっています。作品では、そのような現代に生きるウデへの人々の声丁寧集められていました。

約80分の上映後には、映画製作にもかかわったタイガフォーラムの野口栄一郎さんや、ビキン・ツアー参加者の高橋真美さんと田邊智子さん、それにウデへ語調査で長年現地を訪れてきた筆者も加わって、座談会が行われました。ビキンの人と自然の魅力だけでなく、国立公園化に揺れ動く現地の現代的な課題も紹介されました。

約40名の来場者の皆さんには、タイガからのメッセージを受け取った「お返し」に、タイガへのメッセージを書いていただき、タイガフォーラムの一部をロシア語訳して現地に届けるという趣旨のアンケートにもご協力いただきました。終了後、文学部展示スペースに移動して、関連展示を見ながら熱心に話を聞く来場者の姿もありました。

津曲敏郎
(資料部研究員)

宇宙の4Dシアター

●2017年6月18日・7月21日・8月19日

体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」公演を6月、7月、8月に開催しました。

6月は「お誕生日星座」をテーマに、子供を主な対象としたプログラムを4Dボランティアである塚田則生さんをナビゲータ(解説)、田中裕子さんをパイロット(機器操作)で開催しました。

7月のカルチャーナイト公演「今、夢を乗せて飛び立つー萌えろロケット」では、白衣を着たボランティアメンバーによるアルコールロケット発射実験に会場から大きな歓声が上がりました。続くプログラムはボランティアの清谷優理香さんと関上遼さんの掛け合い、後藤凌平さんをパイロットに進められ、会場の関心を惹きつけました。

8月の「Mitaka 航空で行く宇宙旅行ー138

2017年度

第1・2回ボランティア講座 & 交流会

●2017年6月11日・7月31日

16グループで活動している220名の博物館ボランティアに、所属グループ以外の博物館活動に関心を広げたり、相互交流を図っていたため、博物館ではボランティア講座 & 交流会を開催しています。

2017年6月には、近藤誠司資料部研究員に札幌農学校第2農場をご案内いただく見学会を開催しました。近藤先生から第2農場の由来や意味づけ、そこでの教育と研究、2年前の

公開直前の特別企画展示室での第2回講座



8月公演「Mitaka 航空で行く宇宙旅行」でのコスチューム

億年の時空旅へー」公演では、メンバーはフライトアテンダント風の衣装を着用して臨み、佐藤伽奈さんがナビゲータ、徳丸沙耶夏さんがパイロットを務めました。公演当日のサポートやチラシ制作等の公演準備は4Dボランティア全員で担当して実施しています。

山下俊介

(研究部助教/映像資料学)

耐震改修工事の実際などについてご説明いただいた後、3グループに分かれ、第2農場ボランティアの石田多香子さん、高田和子さん、寺西辰郎さんに解説していただきながらじっくりと見学することができました。

7月には、公開開始直前の特別企画「惑星地球の時空間」の展示室を山本順司准教授にご案内いただきました。地学展示改訂グループのボランティアと共に創り上げた展示について、地球を感じてほしいという展示の意図や展示制作のエピソードもご紹介いただきながら、詳しく解説していただきました。

湯浅万紀子

(研究部助教/博物館教育学)



平成29年4月から平成29年9月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメティクス市民セミナー
「雪虫のなぜ:複雑な生活史と形の変化」
秋元 信一(北海道大学大学院農学研究院 教授)
日時:4月1日(土) 13:30~15:30
参加者:83名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「赤い海藻?」
宮下 和夫
(北海道大学大学院水産科学研究所 教授)
日時:4月8日(土) 13:30~15:00
参加者:78名

バイオメティクス市民セミナー
「透明セルロースナノペーパーと次世代光技術」
谷尾 宣久(千歳科学技術大学理工学部 教授)
日時:5月6日(土) 13:30~15:30
参加者:76名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「かんらん岩の山の自然と人々をつなぐ物語 ~アポイ岳ユネスコ世界ジオパークの地域環境教育~」
新井田 清信
(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:5月13日(土) 13:30~15:00
参加者:92名

地質の日記念展示市民セミナー
「北海道ジオサイト107への旅に出て」
川村 信人
(北海道大学大学院理学研究院 特任准教授)
日時:5月20日(土) 13:30~15:00
参加者:23名

バイオメティクス市民セミナー
「甲虫に見られる構造色多型の遺伝と害虫防除」
熊野 了州
(帯広畜産大学畜産生命科学部研究部門 准教授)
日時:6月3日(土) 13:30~15:30
参加者:68名

地質の日記念展示市民セミナー
「ジオサイトとしての札幌の魅力」
古澤 仁(札幌市博物館活動センター 学芸員)
日時:6月4日(日) 13:30~15:00
参加者:30名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「がん放射線治療の最近の進歩と北海道大学の貢献」
白土 博樹(北海道大学大学院医学研究院 教授)
日時:6月10日(土) 13:30~15:00
参加者:62名

第1回ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー
「夜の博物館からの時間旅行」
湯浅 万紀子(北海道大学総合博物館 教授)
日時:6月16日(金) 18:30~19:30
参加者:30名

バイオメティクス市民セミナー
「視覚センシングとロボット制御の高度化」
小田 尚樹(千歳科学技術大学理工学部 教授)
日時:7月1日(土) 13:30~15:30
参加者:50名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「体の「あぶら」の酸化と抗酸化」
千葉 仁志(北海道大学大学院保健科学研究所 教授)
日時:7月8日(土) 13:30~15:00
参加者:50名

第7回博物館研究会:公開研究会
「人間ゴリラは展示できるか:生き物と共にあることの探求」
大石 高典
(東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター 講師)
日時:7月22日(土) 15:30~17:00
参加者:7名

第2回ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー
「博物学会の夜明け:明治期博物学会の比較から」
山下 俊介(北海道大学総合博物館 助教)
日時:7月28日(金) 18:30~19:30
参加者:15名

バイオメティクス市民セミナー
「農作物の表面構造で害虫の被害が変わる?」
高篠 賢二
(農業・食品産業技術総合研究機構 上級研究員)
日時:8月5日(土) 13:30~15:30
参加者:70名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「鳥インフルエンザ、パンデミックインフルエンザと季節性インフルエンザ対策の要一人獣共通感染症克服戦略のモデルとして」
喜田 宏
(北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 統括)
日時:8月12日(土) 13:30~15:00
参加者:60名

バイオメティクス市民セミナー
「昆虫や植物の濡れを物理と化学から考える」
眞山 博幸(旭川医科大学医学部化学教室 准教授)
日時:9月2日(土) 13:30~15:30
参加者:58名

第8回博物館研究会:公開研究会
「国立科学博物館の展示・学習支援の仕組み ~アマゾンから深海まで~」
篠原 現人(国立科学博物館動物研究部 研究主幹)
日時:9月6日(水) 17:00~18:30
参加者:20名

第3回ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー
「ナスカの地上絵に描かれた鳥は何か?一鳥類形態学からの検討」
江田 真毅(北海道大学総合博物館 講師)
日時:9月8日(金) 18:30~19:30
参加者:30名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「北極の陸、川、海、と利用」
大塚 夏彦(北海道大学北極域研究センター 教授)
日時:9月9日(土) 13:30~15:00
参加者:85名

第9回博物館研究会:公開研究会
「可視化と模型 見える技術・生まれる視界」
中野 不二男
(一般財団法人リモート・センシング技術センター 参与)
日時:9月27日(水) 18:00~20:00
参加者:8名

第4回ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー
「火山としての洞爺支笏国立公園を評価するー国内最大級の火山活動場の誕生と変遷ー」
中川 光弘(北海道大学総合博物館 館長)
日時:9月29日(金) 18:30~19:30
参加者:30名

平成29年4月から平成29年9月までに
行われたパラタクソミスト養成講座

土器パラタクソミスト養成講座(中級)
小野 裕子(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:6月17日(土) 定員:10名
対象:高校生以上(参加者10名)

きこパラタクソミスト養成講座(初級)
小林 孝人(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:7月15日(土) 定員:10名
対象:中学生以上(参加者10名)

昆虫パラタクソミスト養成講座(初級)
大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)
日時:9月16日(土)~17(日) 定員:12名
対象:中学生以上(参加者12名)

平成29年4月から平成29年9月までの
主な出来事

4月1日 事務補助員 大野京美さん 着任

4月3日 2016年度
北大総合博物館年次報告会

4月9日 宇宙の4Dシアター「天の川の中、
天の川の外」開催

4月19日 淡江大学(台湾)学長一行(5名)
解説

4月25日 会計検査院審議官一行(3名) 解説

4月22日 学術資料の活用を志す人のための
meeting 開催

4月28日 地質の日記念展示 北海道のジオ
サイトに見る化石(~6/18)

4月28日 サハリン郷土博物館長一行(3名)
解説

4月30日 ポプラチェーンパロ
パロック音楽の調べ 開催

5月12日 北海道青少年科学館連絡協議会
一行(15名) 解説

5月15日 企画展示「ランの王国」
一函館キャンパスー (~7/14)

5月21日 座談会・写真で楽しみかたり 開催

6月2日 文部科学省高等教育局国立大学
法人支援課(2名) 解説

入館者数(平成29年4月~平成29年9月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
4月	13,324	6	2	北海道のジオサイトに見る化石(4/28~)
5月	17,665	23	6	北海道のジオサイトに見る化石
6月	22,221	48	15	北海道のジオサイトに見る化石(~6/18)
7月	20,201	42	15	
8月	34,208	25	9	惑星地球の時空間(8/4~)
9月	20,041	44	22	惑星地球の時空間

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。

(平成29年4月1日～平成29年9月30日)

(敬称略)

●植物標本

石田愛子, 蝦名順子, 大原和広, 加藤康子, 桂田泰恵, 加藤典明, 金上由紀, 児玉 諭, 駒谷久子, 嶋崎太郎, 須田 節, 高岡さくら, 高清水昭子, 高田和子, 高橋美智子, 田端邦子, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 本多丘人, 目黒嘉子, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

●菌類標本

石田多香子, 齋藤美智子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

青山慎一, 伊藤優衣, 梅田邦子, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 齊藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤拓海, 佐藤諒一, 志津木眞理子, 須長直美, 諏訪正明, 高橋誠一, 高柳達志, 問田高宏, トン シン, 中西茂弘, 永山 修, 伴光哲, 古田未央, 細川真里栄, 松本千春, 松本脩三, 村上麻季, 村田真樹子, 山本ひとみ, 芳田琢磨, 吉野優希, 渡邊雅樹

●考古学

石黒佑紀, 石場ゆり, 稲田 薫, 岩波 連, 江口曉彦, 遠藤 優, 翁 哲毅, 太田 晶, 大泰司紀之, 奥山杏南, 神田いづみ, 木内和秀, 木村則子, 齋藤匠, 齊藤理恵子, 榊山 匠, 佐々木征一, 佐藤美恵, 下川千尋, 末永義圓, 隅田悠花, 田中公教, 田中望羽, ツォグトバーター チンゾリグ, 成田千恵子, 西本結美, 二瓶寿信, 林 和花奈, 東田有希, 平尾嵩志, 水澤こと, 村上凌太, 森本智郎, 渡邊歌織, 渡辺双葉

●メディア

飯島正也, 伊藤優衣, 織田さやか, 卓 彦伶, 武田満希, 辻給里香, 藤井真知子, 三嶋 渉, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 飯島正也, 池上 森, 石崎幹男, 池田雅志, 市橋晃弥, 今井久益, 白田みゆき, 太田 晶, 小笠原玄記, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 川又いづみ, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 國廣亜矢子, 久保孝太, 近藤知子, 近藤弘子, 齊藤優里, 酒井 実, 榊山 匠, 佐藤美恵, 高崎竜司, 高田健太郎, 田中公教, 田中望羽, 谷口 諒, 千葉謙太郎, ツォグトバーター チンゾリグ, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 時永万音, 長瀬のぞみ, 長野あかね, 中谷内 奎, 八丁目清之, 八丁目文枝, 福田祐生, 本田由起, 前田大智, 森 淑子, 守屋友一朗, 山下暁子

●北大の歴史展示

寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 飯島正也, ヴァース ラシェル, 太田 晶, 生越昭裕, 河本恵子, 菅 妙子, 堺 俊樹, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, トン シン, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 濱市宗一, 増田彩乃, 松田義章, 村上龍子, 森 淑子, 山崎敏晴, ロバートクルツ

●翻訳

ロバートクルツ

●平成遠友夜学校

大山圭也, 柿本恵美, 上川 伶, 城下治子, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 松田大徳, 山岸博子

●4Dシアター

石神早希, 清谷優理香, 後藤凌平, 佐藤伽奈, 関上 遼, 田中裕子, 塚田則生, 辻 給里香, 徳丸沙耶夏, 沼田勇美, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子

●ポプラチェンパロ

浅川広子, 石川恵子, 小野敏史, 新林俊哉, 高橋芙悠, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子, 横倉伶奈

●図書

岡西滋子, 今野成捷, 須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 山岸博子

●第2農場

石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大山圭也, 城下治子, 高井宗宏, 高田和子, 寺西辰郎, 渡部典子

●ハンズオン

加藤典明, 久保直紀, 佐藤蓮花, 嶋野月江, 下川千尋, 須藤和子, 徳丸沙耶夏, 仲谷優輝, 沼崎麻子, 濱崎瑠菜, 福澄孝博, 増田彩乃, 山岸博子

●展示改訂(地学)

在田一則, 植松淳子, 大槻淳子, 佐藤健一, 佐藤豪, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 横倉伶奈

●きたみてガーデン

芦澤万里音, 阿部 悠, 伊藤響子, 玉田聖司, 星野愛花里

●水産科学館

宍 世華, 木村克也, 川原田峻平, 外山太一郎, 寺塚真奈美, 岸本早貴, 高橋雄大, 一戸友晴, 神山晃汰, 杉山明日香, 土屋さくら, 能登雄大, 千田哲朗, 長谷川稜太, 木村亮太

●常設展示室新設特別企画

「惑星地球の時空間」

在田一則, 植松淳子, 大槻淳子, 加藤典明, 久保直紀, 佐藤健一, 佐藤 豪, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, 藤井真知子, 古田未央, 松田義章, 三嶋 渉, 山崎敏晴, 横倉伶奈